

“FUKUSHI”にチャレンジする若者を応援する

—FACE to FUKUSHI 事務局長 岩本恭典さん—

聞き手=岩間 伸之

(いわま のぶゆき/本誌編集委員)

今回の「ソーシャルワークの最前線」では、一般社団法人 FACE to FUKUSHI (<http://www.f2f.or.jp/>) の活動を紹介します。この団体は、従前の「福祉」のイメージを払拭し、新しいアプローチで福祉の担い手を確保すべく取り組んでいます。

事務局長の岩本恭典さんに、法人を代表してインタビューに応じていただきました。これからのソーシャルワークの担い手や福祉人材をどのように開拓し、確保していくのか。FACE to FUKUSHI のチャレンジングな取り組みから次代の“FUKUSHI”の息吹を感じてください。(岩間)

現場の声から生まれたFACE to FUKUSHI

岩 間：F2Fの成り立ちについて教えてください。

岩 本：一般社団法人FACE to FUKUSHI（以下、通称「F2F」）の活動のきっかけは、2009年に開催された、アメニティーフォーラムでの「若すぎるから全く新しい実践報告」というシンポジウムに、立ち上げメンバーが登壇したことでした。このアメニティーフォーラムとは、障害のある人たちの地域生活を推進していくための全国的なネットワークを作ることを目的に、毎年2月に滋賀

県大津市で開催されています。毎回、全国から1,500人を超える人たちが参加し、2014年度で19回目を迎えます。

私たちは、「日本の福祉をよくするために、若手がもっとがんばっていこう」そんなメッセージを込めた話をしました。“若手”というくくりで行われたこのシンポジウムでは、たくさんの若手福祉従事者たちが話を聴きに来てくださいました。講演後には、200名を超える方と名刺交換ができ、予想を超える反響をいただきました。

その後、登壇したメンバーを中心に若手福祉従事者の離職率の問題、地域支援の思いなど、さまざまなことについて話し合いを重ねました。しかしながら、思いを共有するまでに時間がかかりました。メンバーの意思統一ができないことで前に進めず、答えが見つからない日々が続いていました。

そこで、まずは実際の福祉現場で働いている方々がどういった意識で入るのかを知る必要があるのではないかという結論に至りました。働く地域や環境、立場によって抱えているものは違うであろうし、こちらが決めつけても何も変わらない。私たちの活動は、現場で働く一人ひとりの意見が反映され、参画意識が生まれるものにし



岩本恭典さん（左）、岩間伸之（右）



2009年2月開催のアメニティーフォーラム（於：滋賀）

ていかなければならない。そんな意識のなか、日本財団にご支援をいただき、アンケート調査を実施しました。

全国の若手福祉従事者を対象に行ったアンケートでは、900件近い方からの想いが集まりました。

アンケート調査では、次のような内容が明らかとなりました（詳細は、<http://f2f.or.jp/profile> を参照してください）。

- 約8割以上が「福祉＝過重労働、低賃金」というイメージを抱いている。しかし、生涯この仕事を続けたいと前向きな回答も8割以上ある。
- 業務上「やや悩んでいる」「かなり悩んでいる」との回答が7割弱ある。
- 悩みの種類は、低賃金・過重労働が高い割合であるが、「職場の理念に向かって業務を進めることができない」という回答も高い傾向にある。

悩みを抱えて仕事をしていながらも、福祉という仕事を続けたい、という意欲的な声が上がってきたことがとてもうれしく、また、その想いを無駄にはいけないと思いました。そのために、まずは、悩みや不安を解消できる仲間づくりを広げようと、全国を行脚し、つながりづくりを目的としたフォーラムを開催することになったのです。

福祉でがんばる若者を応援する

岩 間：F2Fが目指すものについてお話をください。

岩 本：まず、福祉の現状について少しお話ししようと思います。福祉＝3Kという言葉はよく耳にされると言います。3Kとは、「きつい、きたない、きけん」ということです。福祉という言葉を聞くと、マイナスなイメージが先行してしまいがちです。そのため、就職活動のときに福祉業界を選択肢に入れない学生も多数います。実際、大手企業が主催する合同会社説明会では、福祉の法人が出展しても、学生さんの着席数は他業種に比べて、圧倒的に少ないのが現状です。直接声をかけても、「福祉には興味ない」と言っただけで話を聞いてくれることさえしない人もいます。

また、数値的にも、福祉業界は、3年離職率が38.8%（平成23年3月新規大学卒業生：厚生労働省「新規学卒者の事業所規模別・産業別離職状況－医療・福祉」）と全業種のなかでも高水準であり、3年以内に3分の1以上の方が離職していることとなります。就職率が低く、離

職率が高い。それが今の福祉が抱えている課題なのです。

その一方で、福祉業界で働いている人を見るととても楽しそうに働いている人がたくさんいるのです。人の幸せを間近で感じられる、とても尊厳ある仕事にやりがいを感じているという福祉従事者がたくさんいるのです。

しかしながら、福祉人材の発掘や育成に取り組んでいる団体、いわゆる中間支援的な団体はほとんどありません。都道府県社会福祉協議会（以下、「都道府県社協」）が、各都道府県に福祉人材センターを設置し、福祉人材の確保や育成に取り組んでいるのみです。

F2Fが目指しているのは、就職率と離職率の改善です。福祉って面白いな、働いてみたいな、と福祉が当たり前で、あこがれの職業になっていく。そして、働いている人は、仕事にやりがいを持ち、生き活きと働き続ける。そんな福祉の世界を創り出していきたいと思っています。

始まりは全国各地でのつながりから

岩 間：今の活動内容について教えてください。

岩 本：歴史を追って、活動内容を紹介します。F2Fの最初の事業は、「若手福祉従事者ネットワークフォーラム」と題した全国のフォーラム行脚で、2011年に佐賀県からスタートしました。また、今までは任意の団体として活動していましたが、本腰をいれてこの活動に取り組むため、「一般社団法人全国若手福祉従事者ネットワーク」を設立しました。

フォーラムでは、登壇している講師の話を聞いて終わりではなく、話を聞いた後に、参加者同士がつながり合える場をつくらうということで、プログラムの中に交流会を必ず組み込みました。交流会では、登壇された講師を囲みながら、あるいは参加者同士で、日常の仕事の悩みや楽しさを情報交換していました。

フォーラムで生まれたつながりは、その場で終わりになるのではなく、その後も一緒に研修に参加したり、独自に若手福祉従事者の交流会を開催したり、協働で事業を開催したりする参加者もいました。

2014年で4年目を迎える、若手福祉従事者ネットワークフォーラムの活動も、全国14箇所（北海道、青森、秋田、宮城、福島、長野、石川、静岡、愛知、京都、大阪、香川、佐賀、沖縄）で開催し、延べ1000人を超える若手福祉従事者につながるの場を提供してきました。

盛り上がりの様子を少しご紹介しましょう。スタートとなった佐賀でのフォーラムは毎年継続しています。3年目となる2013年には、佐賀という枠から九州という

枠になり、九州各地から300人近い若手福祉従事者が集まってきました。交流会でも一つの会場では入りきらないほど盛り上がり、会場を分けたりテーマを分けたりして、なんとかやりくりしています。

このフォーラムをきっかけにできたつながりがすくすくと育って、他の地域に複数の法人合同で見学に行ったり、法人間で1年間の人事交流が生まれたりしています。

新しい就職フェアのかたちを求めて

岩 間：フォーラム開催をしてみてもの手応えはどうですか。

岩 本：フォーラム開催から3年が経つ2013年に、今後の活動の方向性を話し合いました。というのも、フォーラムがマンネリ化してきている気がしていました。全国各地でつながりをつくってきたけれども、それだけで、私たちが感じていた福祉の課題は解決できているのだろうかと思っていました。なんのためにつながりをつくってきたのか。それをもう一度見直す必要があるのではないかと考えていました。

幾度も議論を重ね、そこで出た結論が、福祉業界に就職した方々への取り組みだけでなく、福祉業界へ若者を巻き込む活動、福祉への入口のデザインをしていこうというものでした。これまで、福祉ですでに働いている人のつながりづくり、やりがいづくりに取り組んできました。しかし、福祉従事者の課題は、福祉で働いている人にだけあるのではなく、福祉で働く前にも起こっているのではないかと考えました。そもそも福祉で働くことを選択する人が少ないのではないか。また、福祉で働こうと思っている人も、本当に働きたいと思える仕事に出会って就職を決めたのかということに疑問をもったのです。

この疑問のきっかけとなったのが、ある都道府県社協主催の福祉の就職フェアを見たときのことで、出展法



若手福祉従事者ネットワークフォーラムでの交流会

人は250法人近くあるのだけれど、その8割近くが高齢者福祉、いわゆる介護職の募集でした。また、ある出展法人のブースを見てみると、おそらく人事担当の年配のスタッフが特に積極的な勧誘もせずに座っていました。飾り付けがないブースがあったり、A4の紙に一言「求む」と書いてあるだけというブースもありました。さらに、就職フェアが開催されたのが7月で、大半の就活生が就職活動を終えている時期から、福祉は就職活動が始まっていたのです。これで、優秀な若者を採用できるのかなと少し不安になりました。

福祉を志す若者はこんな状況で就職を決めなければならないのかと驚きました。これでは他の業種との新卒採用競争には勝てないだろう、学生の就職先選びの判断基準は何なのだろう、障害福祉や児童福祉を志す学生はどうやって就職先を選ぶのだろうか等々、さまざまな疑問や課題が浮かび上がってきました。

離職率の高さなど、福祉従事者が抱えている課題は、働く前に決まっているのかもしれない。就職活動中に、本気で働きたいと思える、魅力ある福祉の現場に出会えば、その課題を解決する手助けになるかもしれない。そう考えたのです。そこで、2014年度からは、自分たち独自で福祉の就職フェアを開催することになりました。

「FUKUSHI ビッグバン！」の開催

岩 間：どのような就職フェアを開催したのでしょうか。

岩 本：「福祉の就職」といえば、各都道府県社協が主催している福祉の就職フェアが定番で、大手企業の合同会社説明会には福祉業界からはほとんど出展がありません。大手企業の合同会社説明会には、出展企業100社以上ある中で、福祉業界は数社、しかも高齢者福祉がほとんどで、障害者福祉や児童福祉などは本当に稀でした。

そんななか、私たちはどのような福祉の就職フェアをデザインするのか、何度も議論を重ねました。その答えは至って単純で、福祉の魅力が若者に伝わっていないのだから、福祉の魅力を若者に伝えていくフェアにしようというものでした。

一般的には、福祉=3Kというイメージがまだまだあるけれども、そもそも、多くの人が福祉の仕事のことを知らないのではないかと。それは、知ろうとしないのではなく、知る機会が圧倒的に少ないのではないかと思います。その顕著な例がWEBサイトだと思います。具体的

な数字はないのですが、福祉業界で自社のWEBサイトをもっていない法人もたくさんあるのではないかと感じています。ましてやFacebookやTwitterなど、今や当たり前となっているソーシャルメディアを活用している法人は本当に少ないです。都道府県社協の福祉の就職フェアでも、出展法人の仕事内容を事前に知るのには難しく、フェアの当日に配られる求人情報が掲載された冊子をもとに選ぶというものでした。このような状態で、福祉の仕事のことを知ろうと思っても、難しいと思います。

そこで、われわれの福祉の就職フェアは、2014年6月20日～7月26日に大阪市西区靱本町で開催しました。「あなたの知らない新世界！日本“最先端”の福祉の就職フェア～FUKUSHI ビッグバン！～」と題して、ソーシャルメディアを使った情報発信をしていくこと、そのうえで福祉の多様な魅力ある世界を表現していくことに重点を置いて実施しました。

具体的には、①デザイン会社に依頼をして、フェアそのものをデザインをし、伝え方・見え方にこだわること、②プロのライターとカメラマンに依頼し、出展法人の求人記事を作成し、それをWEB上に掲載し、いつでも法人の仕事内容を見られる状態にする、③就職フェアの様子はUstreamで発信し、遠方で会場に来れなくても参加できるようにする、④就職フェアに出展する法人は、高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉という既存の福祉だけでなく、制度外の事業を行っている広義の福祉から多様に選定する、⑤福祉はあくまで手段ととらえ、出展法人の仕事福祉以外の言葉で表現し、福祉の魅力も活用しながら表現する、ということを中心にしながら開催しました。

出展法人の例の一つ挙げると、「社会福祉法人ゆうゆう」という北海道石狩郡当別町という人口2万人にも満たないまちで福祉サービスを行っている法人があります。ヘルパー派遣や放課後等デイサービス、ケアホームなど制度上の福祉サービスも行っているのですが、それだけではありません。当別町という小さなまちの課題を福祉の力で解決していく、そんな福祉サービスを展開しています。高齢者、障害のある人、子どもなど、地域に暮らす人々が交流でき主役になれる共生型の交流サロンを運営したり、まちの景観を損ねている古くなったアパートを買い上げ、ケアホームを作り、地域資源を再活用したり、福祉の力で地域づくりを行っているのです。

私たちは、ゆうゆうの仕事を、「破たん寸前の集落の悩みを解決していく福祉の力」と表現しました。北海道までライターさんとカメラマンさんに同行してもらい、



「福祉の就職フェア FUKUSHI ビッグバン！」のポスター

求人記事を作成し、WEBサイトで公開し、さらに、フェアでは法人のパネルを展示しました。

このように、福祉の魅力をしっかりと伝える就職フェアは、大阪の本町というところで1か月間、建物を借りきって行い、延べ800人に参加いただきました。また、60名近い方が出展法人9社にエントリーしていただきました。さらには、Ustream配信では1,000名近い方にご覧頂いています。福祉の就職フェアを開催し、参加者の方から「福祉の仕事は面白い」という声を多数いただきました。また、WEBサイトの求人記事が反響を呼び、フェアには来ていないけど、出展法人の求人に応じ込む方もいらっしゃいました。

今まで触れることのできなかった福祉の機会に触れることができ、福祉の本当の魅力を感じてもらえたのではないかと考えています。今回、この就職フェアを開催して、福祉を学ぶ若者には優秀な若者がたくさんいるけれども、就職活動で取りこぼしが出ているのではないかと感じました。福祉に就職したいのに、働きたいと思える法人に出会えず、他業界への就職に切り替えてしまう。そんな状況が発生していて、まずは、その課題を解決していかないといけないと思っています。

2015年度は、この課題に取り組むべく、福祉系の大学生をメインターゲットに置き、魅力ある福祉と出会える就職フェアを全国各地で展開していこうと思っています。

福祉人材という大きな課題を直視する

岩 間：苦勞されていることやなかなか思うようにいかないなあと感じておられることはありますか？

岩 本：今、私たちが取り組んでいる福祉人材の課題は、いろいろな課題が複雑に絡んでいます。ですので、どこから課題を解決しようかといつも考えています。結構、根深い問題だなと感じています。

若者が福祉と出会う場をつくり出して、働きかけを与える、働き出してから活き活きと働けるような職場環境作りをしていく、さらには将来の福祉業界を担っていくようなリーダーを育てる研修プログラムを作っていく。どこか一部分だけ取り組んでもだめで、一貫した改善をしていかないとよくなっていかないのかなと、でも、そのなかでしっかりと優先順位をつけてやっていかないと、どれも中途半端になってしまう。だから、常に福祉の課題を整理し、今はどの課題に取り組むのが先なのか、どの課題の解決に資源を投入するべきなのかと考えています。

岩 間：いろんな取り組みを積極的に展開されているのですが、岩本さんのバイタリティはどこからくるのでしょうか。

岩 本：素直に楽しいということでしょうか。もともと、なんでも楽しめる性格なのかもしれませんが（笑）。福祉の仕事は、本当にやりがいがあるし、大切な仕事だと思います。けれども、多くの人は福祉の仕事の実際を知らないし、働いている人のなかにはしんどくて辞めてしまう人がたくさんいます。そのような状況をなんとか変えたいと思っています。フォーラムを開催したときに、参加者が笑っていたり、就職フェアを開催したら福祉のおもしろさを知ってワクワクしている学生さんがいました。誰かが笑顔になるということに対して非常に魅力を感じています。

実は、私は大学時代の専攻は栄養学でした。たまたま福祉系サークルの先輩に誘われたのがきっかけで、大阪にあるNPO法人み・らいずで不登校児の居場所づくりの有償ボランティア活動をするようになりました。最初は、アルバイト感覚だったのですが、活動をするなかで、関わった人が笑顔になっていくことにやりがいを感じていきました。そして、大学4年間、この活動を続けました。就職は飲食店に務め、福祉の世界からは離れたのですが、2年経って自分のキャリアを考えたときに、若いときにもっとチャレンジできる環境で働きたいと思っ

て、み・らいずへ転職をきめました。その後、福祉の支援者の発掘や育成をしていく必要があると感じ、FACE to FUKUSHIに籍を移しました。

転職するときに、自分は何がしたいのかを考えたのですが、そのときに出た答えが、「人を楽しませる、笑顔にする仕事がしたい」でした。飲食店で働いたのも、食事を摂るということで、人をもっと笑顔にできればと思っていました。食事には栄養学的な価値だけではなく、おいしいものを食べることで笑顔になるし、誰かと食事することでも笑顔になる。そこにはすごいパワーがあると思っていました。人を笑顔にするということが根源にあったので、手段が変わるだけで、福祉も飲食店も目指すところは一緒だなと思いました。また、現場で障害のある方の支援だけでなく、支援者を支援することも人を笑顔にする手段なのだと思っています。

日本のFUKUSHIを世界最高のWelfareに

岩 間：F2Fのこれからの方向性についてお話しください。

岩 本：少し話が戻りますが、私たちの活動を見直したとき、目指すべきミッションも同時に見直しました。私たちが作りたい世界はどういう世界なのか。それは、「日本のFUKUSHIを世界最高のWelfareにすること」でした。

私たちは、日本の福祉は素晴らしいものだと思います。福祉国家の北欧諸国と比べると、国家予算に対する社会保障比率が低いにもかかわらず、日本は福祉が手厚く、また、今後起こりうる超高齢社会にどう対応していくのかということによって世界から注目が集まっています。

今後、より需要が増し、また質も求められていく日本の福祉。この福祉をより素晴らしいものにし、日本の福祉が世界のスタンダードになることを目指していく、その思いを込めて、福祉をローマ字表記の「FUKUSHI」にしました。そのために、私たちは、日本のFUKUSHIを作り上げていく若者を応援することが使命だと思っています。また、このとき、法人名も「全国若手福祉従事者ネットワーク」から「FACE to FUKUSHI」へと改称しました。

今後、FACE to FUKUSHIの活動をより大きくしていきます。まず、私たちが仕掛けようと思っているのは、全国のいろいろな地域で、私たちの想いを共感し、福祉をよくしていこうとチャレンジする仲間（ネットワーク

プロデューサー＝NP) を作っていくことです。

私たちだけで、全国いろんな地域で仕掛けていくにはとてつもない時間が必要になってきます。また、地域それぞれで、課題は異なり、地域の実情にあった事業展開が必要になってきます。

2011年から行っている若手福祉従事者ネットワークフォーラムで、全国の各地域で、私たちと想いを共感した仲間とたくさん出会ってきました。そんな仲間（NP）と一緒に私たちの活動を展開できるようにしていこうと思っています。年に1回、全国のNPが集まる合宿を開催し、想いの共有や、各地域の取り組みの情報共有、さらには各地域のこれからの戦略を一緒に考えていきます。

2015年度は5つの地域でパイロット的にこのNPの取り組みを実施し、ゆくゆくは全国のすべてのエリア（北海道、東北、関東、北陸、東海、関西、中国、四国、九州、沖縄10エリア）でNPを育てていき、全国各地で「日本のFUKUSHI」を「世界最高のWelfare」にしていく取り組みを目指していきます。

また、人材育成プログラムの構築にも取り組んでいこうと思っています。福祉の就職フェアなどをおして、元気な若者が福祉分野で働き始めると、今度はどうやって、活き活きと働き続けてもらい、「未来のFUKUSHI」を引っ張る存在になってもらうのかということができます。そのためにも、福祉人材育成プログラムを構築していこうと思っています。

岩 間：興味深いお話、ありがとうございます。最後に、何かメッセージがあればお願いします。

岩 本：少し話が変わりますが、2014年9月に、同年8月20日に広島で発生した、大規模土砂災害の現地支援活動に日本財団のプロジェクトとして入っていました。災害発生後、避難所や在宅や支援現場などでたくさ

んの福祉のニーズが発生してくると予想されていました。私たちは、その福祉ニーズに対応するため、現地に赴き、さまざまな方からお話を伺い、福祉ニーズを把握し、支援してきました。

安佐北区という被害のあったエリアでは、安佐北区社協がつくる災害ボランティアセンターのなかに、在宅被災者の福祉ニーズを把握し支援するための被災者サポート班が結成され、私たちがそのチームの運営のサポートに入りました。高齢者が多いこの地区では、福祉ニーズが多数存在しており、1か月間の活動で100件を超えるニーズを把握し、対応しました。

この活動で感じたことは、福祉の力は地域のなかでも大切だということでした。災害発生後、生活再建に向けて、個々人や地域の課題を感じ取り、必要な支援を作っていくときには福祉の力が必要不可欠でした。見立てる力と支援する力。これは、福祉がもっている誇るべき力なのだと思います。

今回の活動は他業種に真似できない福祉の魅力を再発見できた活動でした。福祉の課題は、福祉に魅力がないのではなく、すでにある魅力を発信できていない、伝えられていないことが大きいのだと思います。福祉の魅力をしっかりと世の中に伝えていけば、福祉の価値はどんどん上がっていくはずですよ。

FACE to FUKUSHIは、FUKUSHIの魅力を伝え続けながら、FUKUSHIでチャレンジする若者をこれからも応援し続けていきます。

日本のFUKUSHIが世界最高のWelfareになるように。

岩 間：本日はどうもありがとうございました。新しい感覚による新しい挑戦、とても魅力的なお話を聞かせていただきました。ますます深刻化する福祉人材確保に新しい風を吹き込んでくれることを期待しています。